

身体語彙の性転換

杉山 和也

青山学院大学博士後期課程

1. 「陰核」とは男性器か、女性器か

10世紀に日本で成立した辞典、源順撰『倭名類聚抄』¹⁾の「陰核」という条には、次のような記事が見える。

陰核 食療経云、食蓼及生魚、或令陰核疼〈陰核 俗云、篇乃古〉。刑徳教云、丈夫淫乱割其勢〈勢者則陰核也〉

すなわち、「陰核」は俗に「篇乃古(へのこ)」と言うのだという。「篇乃古(へのこ)」とは、男性器の睾丸を意味する和語である²⁾。つまり、この辞典の記事に拠れば「陰核」という語は、女性器のクリトリスではなく、男性器を指したことになる。「陰核」という語を女性器のクリトリスの義として通用している現代人にとっては意外に思える訓だが³⁾、現代に成る主な漢語辞典である『漢語大詞典』⁴⁾や『漢韓大辞典』⁵⁾の「陰核」条にも「睾丸」とある。つまり、「陰核」を男性器の睾丸とする方が漢語の理解としては正確と言え、実は現代人の方が誤っていると言えそうである。そして、この「陰核」を「篇乃古(へのこ)」とする訓は、中世成立の諸々の古辞書にも継承されている。したがって、この訓は中世以前に広く通用していたことが窺える。つまり、中世以前に於いて「陰核」という語は男性器を指したことになる⁶⁾。そして、それは漢語としては正確な理解なのであった。

それでは、現代に於ける「陰核(=クリトリス)」という、漢語本来の語義とは異なった理解は、いつ、どのような経緯で生まれたのだろうか。本稿では、簡単にその経緯を追ってみたい。

2. クリトリスを表す古語

中世以前に「陰核」という語が男性器を指したとするならば、女性器のクリトリスを指す語にはどのようなものがあったのか。ここではまずクリトリスを意味する古語を確認しておきたい。『倭名類聚抄』には「吉舌」という語が立項され、次のような記事が見える⁷⁾。

吉舌 楊氏漢語抄云、吉舌〈和名比奈佐岐〉。

『日本国語大辞典・第二版』によれば、この「比奈佐岐(ひなさき)」という語が女性器のクリトリスを指したらしい。「ひなさき」は、古辞書や古往来(書簡形式の教科書)である『新撰類聚往来』⁸⁾にもその用例が見られる。また、次の資料にも、

▶松葉軒東井・編『譬喩尽』巻八(天明六年成立)⁹⁾
吉舌^{ひなさき}〈雛先也 女根、嬪頭、云り〉

と見え、中世、近世に至るまで用例の認められる語であることが確認できる。この語の漢字表記については、『倭名類聚抄』に見える「吉舌」¹⁰⁾の他に、「陰舌」、「赤舌」、「姪毛」、「門」、「閤」、「宮」など様々ある¹¹⁾。

上代以来の伝統的な和語である「ひなさき」という語はまた近世にも継承される訳だが、華々しく性文化が謳歌する近世という時代性故か、クリトリスを指す新たな語が様々登場するようになる。そして、この内、最も広く通用するようになったのが「さね」という言葉である。次の資料には「さね」の早い時期の用例が認められる。

- ▶寛永整板八行本『昨日は今日の物語』上(17世紀初頭成立)¹²⁾

ある女房、河へ洗濯せんとて行けるが、何としてか、女の「さね」を、大きな蟹がはさみて

そして、この語の語義は次の資料から、クリトリスを指すものと考えられる¹³⁾。

- ▶『拾遺枕草紙花街抄』(十六丁ウ・頭注)¹⁴⁾

「さね」玉門の上頬ウハツラ ツビヘに聳ツビヘたる物を云、順ツビヘ和名抄ツビヘに三根サネとかけり、玉門ツビヘの根サネと嬉悦キエツの根サネ、子コを生ユする根サネといふ儀なり

「さね」はもともと、果実の種を意味する語である。漢字では、「実」とも「核」とも表記する¹⁵⁾。形状の類似性から、転じてクリトリスも指すようになったものと推測される。この語は近世及び近現代に渡って広く用いられた。

3. 「陰核」という語の性転換

ここで思い返したいのが、冒頭に述べた「陰核」という語である。次の資料では、「陰核」という漢語が、女性器を指す和語「さね」と結び付けて捉えられている¹⁶⁾。

- ▶木がくれのおきな(沢田名垂)『阿奈遠加志』上(文政五年跋)¹⁷⁾

これを「さね」とよぶことは、から名カラナに「陰核」なニどいふことあるよりよびつたへたることなるべけれど

- ▶黒沢翁満『酒席醉話』下(嘉永二年刊)¹⁸⁾

「陰核」を今は「さね」といへども昔はひなさきと云しなり。

すなわち、如上のクリトリスを意味する語の概観を踏まえると、「陰核」をクリトリスの義とする用法が登場する背景には、近世以来広く通用していた「核(さね)」という和語の影響が考えられる。つまり、クリトリスを意味する「陰核」は、

「核(さね)」という和語の影響の下に発生した、或種の和製漢語として位置付けられそうである。

そして、クリトリスに対する「陰核」という呼称は、例えば以下の一連の資料に見えるように¹⁹⁾、近代以降、西洋医学の領域に於ける身体語彙としてしばしば採用されるようになる。

- ▶富沢春淇・編訳『造化繁殖演義図説』(北川堂・芳潤堂, 1879年) 卷之上, 女子生殖器説,

陰核インガク
小陰唇インシンノ前ゼンタン端クワイハウヨリ外トツシユフ方エンニ向マヘノハシテ突マ出ルスルマルキ 門カ
柱チュウシヤウ状ハシラノ者ハシラヲ「陰核」ト云フニ

- ▶エルトン・述, 古矢嘉満子・記, 田代基徳・関『造化生生新論』(正栄堂, 1879年) 上, 第四条 婦人生殖器

外器インニハ, 陰フ卓タイシン大シヨウシン唇インガク小シヨジョマク唇ニウ「陰核」ハ処バウ女ヲ膜ヲ及算ビ乳シ房シ等算ヲ算シ入シ

- ▶約瑟・列第・著『解剖訓蒙』(啓蒙義舎, 1880年) 第八篇, 生殖器論

〔肉様尖〕或ハ「陰核」Clitorisハ陰茎ニ相当スルー器ニシテ

- ▶奥山虎章『独和医学字典・初編：解剖生理学語部』(自由自在独立不覇堂, 1881年)²⁰⁾

Clitoris, 「陰核」(漢名陰挺)

- ▶田口和美・編『解剖攬要』(英蘭堂, 1881年) 卷之八, 第四章

陰挺 Clitoris 陰挺 <一名「陰核」>

- ▶勃尙著・菅野虎太訳『人体要論』(1881年) 第二篇, 生殖器の説

女子ニハ, 陰門, 陰唇, 陰前庭及「陰核」ヲ稱ス

- ▶ホリック・著, 守谷親国・訳『生殖器新書：一名・既婚未婚男女必読婚姻案内』(博文館, 1897年) 第二章 女子外陰部

凡そ大豆^{だいづ}大^{だい}の堅^{かた}き物^{ぶつ}体^{たい}あり。之^{これ}を[●]陰核[●] (Clitoris) と名^{なづ}く。

なお、他方の男性器の睾丸を指す語については、例えば先に挙げた奥山虎章『解剖生理学語部』(1881年刊)でも「Testea, 睾丸」などと見える。医学用語としては、「睾丸」という呼称が定着、普及し、「陰核」という漢語は採られなかったようである。つまり、睾丸に対しては「睾丸」、クリトリスに対しては「陰核」が医学用語として定着したことが窺える。クリトリスとしての「陰核」は、正統な漢語ではないということもあり、当初は飽くまでも俗語であったと見られるが、このように医学用語として定着をみることにより権威化され、広く普及するに至ったと考えられる。

ただし、睾丸を意味する「陰核」が、すべて消えてしまったかという点、そういうわけではない。大槻文彦編『言海』(1889-1891年刊)には、

へのこ(名) [●]陰核 (一) {陰囊ノ中ノ核. 睾丸. ^{キョウタマ}和名抄「陰核, 篇乃古」(二) 今, 俗ニ, 誤テ, 陰莖.

として、「陰核」の漢語として正確な知識が認められる。『広辞苑』、「へのこ」条は、漢字表記を「陰核」とし、『倭名類聚抄』の記事を引いている。現代に於いても「へのこ」を敢えて漢字表記する場合は、「陰核」となるようである。

また、諸橋轍次『大漢和辞典』には、

【陰核】^{イノコ}①陰部. 男女の性器. ②男性器. へのこ. [倭名類聚抄, 形体部, 莖垂類, 陰核] (中略) ③女性器の核. さね.

と見える。男女の性器と説明し、男性器と解するにあたっての用例としては、本稿冒頭に紹介した『倭名類聚抄』「陰核」条が挙げられているが、「女性器の核」という解釈については用例が挙がっていない。恐らく編者は「陰核」を「女性器の核」と解する語義について認識していたものの、その

根拠となる用例を用意することができなかったのであろう。

むすび

以上、簡単に「陰核」の語誌を追ってみた。「陰核」は、ヒトにとって最も身近であるはずの身体の語彙でありながら、その語義に大きな転換を生じさせていた。これには、やはりこの語が、公の場で用いることが憚られる、性器に関する語彙であったということが深く関わっているものと考えられる。

そして興味深いことに、「陰核」という語がこのような性転換を遂げたのは、実はどうやら日本だけではなさそうであるということも最後に指摘をしておきたい。すなわち、前近代に於いては、朝鮮半島でも「陰核」は飽くまでも漢語本来の用法で、男性器を意味していたのであるが²¹⁾、現代では中国語の「陰核」も、韓国語・朝鮮語の「음핵(陰核)」も、クリトリスを意味しており、それぞれ一般に用いられているのである²²⁾。

例えば「軟骨」のように、近代以降、医学用語としての和製漢語が影響して、中国に於ける同じ綴りの漢語の語義が変容したという事例が既に指摘されていることを踏まえて考えると²³⁾、近世日本で生じた「陰核(=クリトリス)」という用法が、近代日本の西洋医学の領域で活用され、権威化されるようになり、そしてこれが日本以外の漢字文化圏にも影響をもたらした。このような経緯が一つには想定できるのではないだろうか。

注

1) 本文は、二十巻本である元和古活字本『倭名類聚抄』に拠った。十巻本の『箋注倭名類聚抄』では、本条末尾の割注が「〈勢即陰核也〉」となっている他は、異同なし。なお、本稿では引用の際、読み易さを考慮して現在通行の字体に当て替え、私に句読点を補った。

2) 「へのこ」という和語には、睾丸という意味の他、陰囊、あるいは陰莖を意味する場合もある。語義が曖昧で、用例を各々、文脈から判断するしかないが、男性器を指す言葉であることは間違いない。『日葡辞書』[1603~1604]に「Fenoco. Bolso dos testiculos.」(〈訳〉「へのこ. 睾丸の袋.」)。『新猿蓑記』[1061~

- 1065 頃]「謂問(ヘノコ)大而如虹豎梁」。
- 3) 『広辞苑』第六版(岩波書店, 2008年)の「いんかく【陰核】」条にも「女性の尿道出口の前方にある小突起(後略)」とあり, 現代語では通常, 女性器のクリトリスと解されている。
- 4) 漢語大詞典編纂委員会, 漢語大詞典編纂処・編『漢語大詞典』漢語大詞典出版社(上海), 1986~1994年。
- 5) 檀國大學校附設東洋學研究所・編『漢韓大辞典』檀國大學校出版部(大韓民国), 1999~2008年。
- 6) 『好色訓蒙図彙』人支(1686)三年版行。国際日本文化研究センター蔵(請求記号: KC/172/Yo)。同センター(<http://www.nichibun.ac.jp/>)の艶本資料データベースに拠る)には, 男性器の図に「陰核(へのこ)」と記される。安楽庵策伝『醒睡笑』巻八にも「大陰核(へのこ)もちたる侍の馬にて渡りたれば」(武藤禎夫, 岡雅彦・編『嘶本大系』第二巻, 東京堂出版, 1976年, 所収)と見え, 近世に於いても「陰核」を男性器と捉える理解は散見される。
- 7) 本条は十巻本, 二十巻本とて異同なし。『倭名類聚抄』の引く『楊氏漢語抄』は養老年間(717-724)成立。当書について詳しくは, 藏中進『倭名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考』大東文化大学東洋研究所『東洋研究』第145号, 2002年11月を参照。
- 8) 『統群書類従』第十三輯・下, 所収。
- 9) 本文は, 松葉軒東井・編, 宗政五十緒・校訂『たとへづくし: 譬喩盡』同朋舎, 1979年に拠った。
- 10) なお, 「吉舌」という漢語に関しては, 諸橋轍次『大漢和辞典』「吉舌」条を引くと「めでたい舌」とあるのみで, 女性器のクリトリスをその意味として挙げていない。檀國大學校『漢韓大辞典』もこれと同様である。『楊氏漢語抄』には, 唐代の俗語と見られる語が収録されている(藏中進02)。したがって, 「吉舌」は唐代の俗語であった可能性がある。
- 11) 『時代別国語大辞典: 室町時代編四』三省堂, 2000年, 「ひなさき [雛尖]」条, 参照。
- 12) 本文は, 『統群書類従』第三十三輯・下, 所収のものに拠った。ただし, 読み易さを考慮して, 私に濁点, 句読点を補い, 適宜, 漢字に当て替えた。
- 13) ただし, 渡辺信一郎(『江戸の性愛術』新潮社, 2006年, 123頁)は, 「さね」は通常クリトリスを表すが, 小陰唇という意味合いもあるとする。
- 14) 『洒落本大成』第三巻, 中央公論社, 1979年。
- 15) 「さね」を「実」と表記したものとしては, 例えば『好色訓蒙図彙』人支(国際日本文化研究センター蔵・請求記号: KC/172/Yo)に「実長(さねなが)」とあり, 図も描かれる。他にも溪斎英泉・画『筑紫琴』巻三(国際日本文化研究センター蔵(請求記号: KC/172/Ha)。艶本資料データベースに拠る), 八丁裏「さねがしらはまろくふく敷れて」などがある。「核」と表記した例は後出。
- 16) 玩宮隠士『女陰万考』太平書屋, 1982年は『閨房学外鑑』坤(1645)(正保二年)の「核弄腹擦の事 女陰核を徐々に弄し」という用例を引く。「陰核」をクリトリスの義で用いた早い時期の用例と見られるが, 稿者は同書を未見。なお, 『女陰万考』については, 辻晶子氏の御教示により知った。
- 17) 本文は, 木がくれのおきな(沢田名垂)著・猫かひのをのこ(沢田薫)校『阿奈遠加志』1920年に拠った。当資料は, 国立国会図書館デジタルコレクション(<http://dl.ndl.go.jp/>)にて閲覧可(2016年3月現在)。
- 18) 本文は, 黒沢翁満・著, 不破義幹・校訂『酒席醉話』桑名宗社, 1984年に拠った。
- 19) 以下の資料は, 国立国会図書館デジタルコレクション(<http://dl.ndl.go.jp/>)にて閲覧可(2016年3月現在)。
- 20) この資料では, クリトリスの義に用いた「陰核」は和製漢語であると把握されていることが窺われる。なお, 奥山虎章『医語類聚』(1872年刊)には「Citoris, 陰核」と見える。『日本国語大辞典・第二版』は, この用例を, 「陰核」をクリトリスの義として用いた例の初出としている。ただし, 同書には「Clitoris, 挺孔」という条も見受けられる。
- 21) 李圭景『五洲衍文長箋散稿』人事篇・人事類, 身形, 支体积名弁証説「玉莖〈一名陰核。竝男莖。〉」。朝鮮半島でも19世紀の段階では, 「陰核」は飽くまでも男性器を意味していたと見られる。
- 22) 大東文化大学中国語大辞典編纂室・編『中国語大辞典』角川書店, 1994年には, 「[陰核] yīnhé [名]〈生〉陰核。さね。」。安田吉実・孫洛範・編『新訂日韓辞典』民衆書林, 1997年には, 「いんかく【陰核】 inkaku [名] 음핵; 공알。= さね・みほと。」。大坂外国語『朝鮮語大辞典』「음핵(陰核) [名] 【生】陰核, 陰挺。 [類] 공알。」と見える。
- 23) 沈国威『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容【改訂新版】』笠間書院, 2008年, 参照。